

『大いなる遺産』へのアプローチ(3)

「二つの結末」

松岡光治

『大いなる遺産』の結末は、初代リットン男爵 (Edward Bulwer-Lytton, 1803-73) がピップを孤独な男として残す結末に反対したので、ディケンズが最初の原案をゲラ刷りの段階で修正したものである。原案では修正版の最終章(第59章)の最初の部分 - ハーバートの共同経営者として東洋で11年ほど働いたのち、帰国してジョーとビディーに再会し、彼女にエステラのことを忘れていないと言った部分 - 以下がなく、その最後の部分は第58章に続いている。そして更に2年後、ピップはピカデリーで馬車に乗ったエステラに呼び止められるが、そのまま二人は簡単な挨拶をただけで別れてしまう。これに対して修正版では、帰国したピップがサティス・ハウスの荒廃した庭でエステラと再会する。そこで、ピップは彼女の顔、声、そして手の感触によって、彼女が苦しみを通して昔の彼の心を理解できる心を持つほどに変化したことを確信し、彼女と手を取り合って庭を出て行く。

変更された結末については賛否両論があるが、最初に不平を鳴らしたのは親友フォスターであった。彼は修正された結末を改悪と見なし、「やはり最初に書いた結末の方が物語の自然な進行や趣旨に合っているように思える」(Forster 9: 3) と述べた。そして、ヴィクトリア朝末期のギッシングやチェスタトン以降、20世紀中葉に権威あるディケンズ伝を著したエドガー・ジョンソン (Johnson, Edgar. "The Tempest and the Ruined Garden." *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. New York: Simon and Schuster, 1952.2: 992-94) を経て現在に至るまで、作品の統一性ゆえにディケンズの最高傑作とされる『大いなる遺産』については、その修正された結末を玉に疵と見なす批評家が少なくない。

このように、ディケンズの死後しばらくは、作品全体の雰囲気との整合性から、ピップの悲哀感が漂う最初の結末を支持する傾向が強かった。そして、作品冒頭との照応関係をかんがみ、後日談にすぎないピップとエステラの結末は重要ではなく、むしろ彼が精神的な再生を遂げ、ジョーとビディーの子供(ピップ)に対して、自分に対するマグウィッチ以上によい代父になる結末の方を重視する意見 (Meisel, Martin. "The Ending of Great Expectations." *Essays in Criticism* 15 (1965): 327) をはじめ、これまで作品の結末については様々な解釈がなされてきた。しかしながら、次第に修正された結末の方が高く評価されるようになってきている。特に最近では、ピップとエステラが別れるのか結ばれるのか判然としない曖昧性、あるいはそのアンビヴァレンスのために、修正版を支持する批評家の方が圧倒的に多い。

結局、この問題の解釈の分岐点はエステラの道徳的变化を許容できるか否かにあるように思える。1937年の Limited Editions Club 版を編集した時に、作品の結末に原案を復活させて論争の火に油を注いだバーナード・ショーは、最初の結末を全面的に支持したわけではなく、エステラの変化についてのピップの確信が蛇足だと言い、修正版については心理

的によくないが、芸術的には原案より調和していると主張した (Shaw, G. Bernard. "Preface." The Limited Editions Club ed. Edinburgh: R. & R. Clark, 1937. v-xxii)。しかし、特にニュー・クリティシズムの観点から捉えた場合、修正版は芸術的な点のみならず心理的な点においても調和しているように思えてならない。ピップとエステラが会う場所については、二人が最後にサティス・ハウスで別れたことを考えると、その後の再会場所も喧噪のピカデリーよりは、夕方の冷たい銀色の薄霧に包まれたサティス・ハウスの荒廃した庭の方がふさわしい。なぜならば、庭も薄霧も作中で有機的に反復使用されているイメージであるからだ。また、ピップが彼女の変化を感じ取った手は、沈黙の言語として作品を通して最も頻繁に使用されるイメージである。これは一般的な読者の好みを考えて修正されたハッピー・エンディングのように見えるが、それだけの理由でディケンズがリットン男爵の忠告に従ったとは考えられない。つまり、修正に応じたのは文学市場への配慮も確かにあったかも知れないが、それ以上に修正版が作品全体の構成美と抑制されたトーンに原案よりも調和すると思ったからに違いない。

ただし、修正された結末については、そこにピップとエステラの別離を読み取る批評家と結婚を読み取る批評家に分かれている。1868年の Charles Dickens Edition 以降に定着した最後の一文 ("I saw no shadow of another parting form her.") に関しては、1861年の版 ("I saw the shadow of no parting from her.") のようにピップはエステラと別れるつもりがないと解釈できる一方で、「ピップとエステラは二度と会わないので、また別れるようなことはない」(Dunn 41) と解釈し、その曖昧性にディケンズの意図を見出すこともできる。最後の一文は何でも予示し得ると言ったのはミルトン・ミルホーザーで、彼はそのように曖昧な状況で語り手が自分の知っている現在の事実 (エステラと別れたのか結ばれたのか) を語らないのは何故かという疑問を呈している (Millhauser, Milton. "Great Expectations: The Three Endings." DSA 2 (1980): 274)。

「新たな別れ」に先行するピップとエステラの別れの場所は、第44章で彼が彼女からドラマルと結婚するつもりだと聞かされ、断腸の思いで彼女と別れたサティス・ハウスであった。しかも、修正された結末でピップは、その最後の別れの思い出がいつも「悲しくて苦しい」("mournful and painful") ものだと彼女に告白している。修正版でエステラがピップの心を理解できるようになって彼の赦しを求めたこと、そして彼女の最後の言葉が「別れても友達のままにしましょう」("[We] will continue friends apart") であることを考えるならば、「新たな別れ」とは物理的なものではなく、「新たな(悲しくて苦しい)別れ」という精神的なものだと解釈するのが最も妥当ではあるまい



か。

しかし、最後に二人が手を取り合ってサティス・ハウスの廃墟を出て行く場面は、結婚したクレナム夫妻が教会から騒々しい町の中へと下りて行く『リトル・ドリット』の結末を想起させる。その結末に漂う「日向と日陰」(“sunshine and shade,” 2: 34) の混在したイメージがクレナム夫妻の完全な幸福を約束しないように、夕方の「薄霧」と月の「静かな光」という明暗が交錯した『大いなる遺産』の修正された結末も、ピップとエステラの幸せな結婚を約束するものではない。それは読者の様々な解釈を許容する開かれた結末である。特定の解釈に最終的な権威を与えることを疑問視した K. J. フィールドは、『大いなる遺産』の長所の一つとして解釈の多様性を内包する点を挙げた (Fielding, K. J. “The Critical Autonomy of ‘Great Expectations.’” *Review of English Literature* 2 (1961): 86) が、修正された結末の曖昧性についても同じことが言えるだろう。